犬山のまちづくり　市民活動・地域活動インタビュー
Vol.4　楽田地区コミュニティ推進協議会
会長　森岡　万朱衣さん

コミュニティは「人」のつながり

地域活動は、町内会・自治会組織の歴史から、会員を世帯単位（＝世帯主が男性）とする考え方が根強いことからも、男女共同参画の推進が課題とされています。(今年度犬山市内の町会長は 94%が男性) そんな中、市内 6 地区の小学校区単位コミュニティの中で唯一、女性で会長を務めるのが、楽田地区コミュニティ推進協議会の森岡万朱衣（やすえ）さんです。
今回地域活動を考えるにあたり、楽田コミュニティの活発な活動の秘訣、また今後の展望について、お話を伺いました。

―「持続可能なまち」について、どのようにお考えですか？

森岡：　「持続可能」ということは、例え世代交代をしても、ずっとそこに携わってくれる人がつながっていくことだと、私は思っています。地域は順繰りなので、今はまだ幼児でも、中学生になって手伝いに来てくれたりとか、大人になっても、高齢者になっても、その地域の歴史を継承して、つながっていくことが持続可能なまちづくりだと思います。

―そのようにつながっていくためのポイントは、どういったことなのでしょうか？

森岡：　やっぱり一言で言うと「思いやり」だと思います。例えば、思いやりを持っているから、相手の意見を尊重できます。思いやりがあれば、どんなふうに考えているのか意見を聞いて、理解することができる。しっかりと向き合って思いやりを持って接すれば、最初から 10 まではいかなくても、いくらかは思いやりで返してくれます。人を思いやることができない人には、まちづくりは難しいと思います。あと、若い世代の人たちの創造力を取り入れつつ、これまでやってきたこともしっかり伝える。今までやってきた人が縁の下の力持ちになって、若手にやらせてあげることが大切です。

楽田地区で、若手の役員が活躍してくれているのは、考えを押し付けるのではなく「伝えて」いるから。上の役員がうまくいかないと分かっていても、「こんなことには気をつけて、こうしたらいいんじゃない？」とアドバイスはして、まずはやらせてあげます。

―そういったポイントは、どこからきているのですか？

森岡：　それは、楽田コミの初代会長である故勝野会長の影響が大きいと思います。

私は元々、朝一番で子どもを保育園に送り、名古屋でバリバリに仕事をして、遅く帰る生活だったので、地域との付き合いはほとんどなく、授業参観に行っても、知り合いはほとんどいませんでした。それが、子どものスポーツ少年団の役員のじゃんけんに負けて、ちょうどそのときにコミュニティ発足の年で、自動的に活動に関わるようになりました。

勝野会長は、他人の意見を否定することがほとんどなく、「若者、年寄、男女も関係ない、いいものはどんどん取り入れろ、やってみろ、力になってやる」といつもおっしゃっていました。まだ現役で仕事をされていましたが、ボランティアでこんなに地域のことを思って人のために行動できる方がいるんだと、とても驚きました。周りに巻かれない魅力があり、みんなの力を引き出してくれた。だから、周りも皆付いていくんです。私も忙しい生活の中で時間を作り、どんどんコミュニティ活動にのめり込んでいきました。よく忙しいから、時間がないから、と言いますが、それは自分が時間を作ろうとしていないだけということが、その時分かりました。

ただ、クリスマス会で 6 メートルのサンタクロースをペットボトルで作る企画だけは猛反対されましたね。協力してくれる人も少なくて、確かに作るのは大変でしたが、できてしまえばみんな集まってくるし、勝野会長も「よーやった！よーやった！」と、新聞社を呼んでくれました（笑）

―協働のまちづくり基本条例では、「持続可能なまち」を創っていくために、いろんな立場の人が協働で取り組んでいくことを規定していますが、地域活動団体の役割はどういったことでしょうか？

森岡：　大事なのは「人」であり、コミュニティは「人の集まり」です。例えば、まちづくりで何かやりたいことがあったときに、サポートする人がいなければそれは叶いません。コミュニティは子どもから高齢者までいるので、それをいろんな人でサポートできる。コミュニティは、人のために何かをしたいと思う人の集まりなんです。

あと、楽田コミュニティが市から管理を受託している楽田ふれあいセンターが、非行少年たちのたまり場になりかけたことがありました。先ほど「思いやり」の話をしましたが、声をかけてみれば、普通の子ども達なんです。施設内に散らかすゴミを注意しつつ、ご飯を作って食べさせたこともありましたが、今では親になって、子どもを連れてきてくれたりします。地域は順繰りなので、その子がおじいさんになったときに、自分の子どもの子どもがお世話になることだってあるかもしれません。地域とは、そういうものだと思います。

―今後の展望を教えてください。

森岡：　今までは 20 年以上子どもたちのことに力を入れてきましたが、これからは高齢者の支援にも力を入れていきたいと考えています。自分が高齢者になったときに、どんな地域になっていてほしいか考え、まずは買い物支援や移動支援の事業を計画しています。新型コロナウイルスの影響は大きいですが、自分が会長であるうちに、事業を確立していきたいです。

その先は、若手も育ってきているので、彼らにまかせます。私も、会長を退いたらコミュニティを辞めるというわけではないので、縁の下から皆を支えていきたいと思っています。